

「復活節——闘いは既に勝利している」

——ラザロ解放共同体形成をめざして——

壇 谷 安 弘

おい繁った葉を天空に延ばして、南風にザワザワとゆらめき、

幹には武骨なトゲトゲしい鎧をつけ、地上には人間に食を供すべき一点の隙もない。独り活きる独活は、精力残る晩夏に茎を切り捨て、地中に深く喰い込んだ怪奇な様相を呈する根。子を掘り起こし、土室の中に活ける。光を奪われた地底にあって、適度な温度と水分を加えられ、独活は埋蔵したエネルギーを、真白く水々しい新芽に、——驚くなかれ一メートルの長きに及ぶ新芽に結晶させるのだ。それを鋭利な刃物で切り取られ、箱詰して市場へ送り出される。

一度新芽を切り取られた独活は、二度、三度と新芽を再生させる。その反骨性を恐れよ。

地上の作物を爆風でもぎとられた砂川農民の独り活き抜く知恵は、地中深く且つ広く、孤独な重労働に耐え抜く独活作りの中に生きている。上瀬谷の農民も、農地が米空軍の電波障害制限区域である為に、かみせや 鎌をふるうことを許されず、やむなく地中深く独活作りで生活を支えているのである。

独活の料理の仕方、そのうまさ……等等を語るのはやめにし

て、我々は、そのホレボレするような、そして心憎い遅しさに敬意を表し、我々の独活的な生活について考察することにしよう。

第一回砂川合同ワークキャンプは、「根拠地の思想を再度検討する」という、歴史的テーマを実践的に掲げて、（ラザロ・エクレンシア建設）と云う古くて耳新しい造語と共に登場した。ラザロ・エクレンシアなる奇妙な言葉が觀念の産物に墜し得なかったのは、砂川十四年に亘る全人民的な闘争の歴史と、そこに具体的に関わり地元農民と切っても切れない仲間になりつつある青年の一群が根付きつつある重たい事実^{（一）}に依るであろう。もとより、砂川新世代を自負する新青年は、アスファルトとコンクリート壁の中で、酸素の少ない空気にあえぎ、スモッグで紫外線を奪われ、不純な水道水と、新鮮味のない食品で育って来た都会の寄生植物的な脆弱さ^{（二）}が伴っていたことは否めない。加えて非農民的な放浪癖が災いしているといったところだろうか。

我々、といったら語弊があるから、少なくとも自分は、宮岡さんの如き、独活そのものではない。だが、砂川の斗う独活の思想に魅せられ、永続的共闘を誓う者である。

我々は独活にまで至らなくとも、一見ひ弱な細い葉を、すき腹

にタメ息の如くゆらゆらさせている人參畑に想いを馳せ、彼らの畑を紅らめよりそって共生していく生き方に学ぼうではないか。人參を植えるには、間隔をあけすぎてはならない。個々の成長が全体の成育を助けているのだ。

砂川の荒廢国有地は実に三万余坪、我々は地上はもとより地下利用の思想をますます強力に推進せねばならない。(土との格闘)こそ、我々の(根拠地の思想)の土台を構築するものであろう。そしてそれは既に一九六九年二月二日をもって実現しつつある。

自分が当初地下の(カタコム)として構想した(ラザロ・エクレシア)は、今や、(砂川反戦墜壕)として姿を現わした。

我々ラザロの危機は、反戦を闘う仲間の危機と一体化して前進を開始している。「寒月や、旗を守りて土の中」砂川現地は、滑走路直前、頭上にハタメく拾数本の色とりどりの旗を守って、吹雪の中を昼夜わかたぬ警戒体制下に入った。

砂川青年の家はこの時点から、兵站基地として臨戦体制をとった。セントラル、ヒート方式……寝具不足による、炬燵を囲むゴロ寝と、坂場に等しき労働の場、米軍機の挑発的風圧攻撃にさらされた粗末なザンゴウ、出入りの激しいゴツタ煮的共同生活：折り重っていった疲労……これらが第一回合同ワークキャンプを表象する記念すべき現実であった。その中から参加した個々の仲間が引っぱり出して来るものを自分はあせらずに期待している。居直りの闘志をこめよ。我々は、未だスタートしたばかりである。

エネルギーを地下茎に蓄積し、切っても切っても不死身の如く新芽を再生させていく独活の如く、土中に眼光をキラつかせて矛盾多き現体制を粉碎する志を固めようではないか。

斗いは、まず自己との斗いに始る。赤裸々なる自己の存在を、砂まじりの寒風に吹きさらさせる地点から我々の斗いは始る。

孤絶した存在としての自己を意識するまで自己の立脚点を掘り進めよ。家庭も、学園も友人、サークルも国家も国境も全て全て、当初より実体ある対象として認識する価値を有してはいない。有限から無限へ、死から復活の連鎖へ……。受難前節に構想された(ラザロ・エクレシア)は、第二回砂川復活節を前にして新たな装いをもって実体化されつつある。

義の斗いに招かれし者に、熱き血による永遠の連帯と尽きざる創造の神の祝福を祈る者である。

一九六九年三月三〇日

砂川反戦墜壕にて